

ところが母親は様子をかへて奥に伴れて入つた。再び出てきて言ふには「あなたはなせ理由なしに小兒を譽めるのか何もせぬのに猥りに譽めると子供は稱讚を輕じ虚榮心を養ふやうになつて教育上非常に害があるから再び斯様なことを言つては困ると言つた」と其聽講者は話した。

日本の婦人にこれだけの注意を以て小兒を育てるものが果して幾人あるであらうか。此ことを考へれば我國が前途に一等國として列強と對抗するのは中々遠大な事であると思れる。然ば如何にしたならば適當な處置を執ることができやうか、それには種々なる注意が必要であるけれど就中小兒自らの働きに由つてできた業績を重じてたとへ些細な事と雖小兒が自分の考へと力とでしたことは大に賞讃して其勞を認めてやるやうにするが好からう。着物の美しきは子兒の力ではないのにこれを譽めるのは害あつて益なきこと故例へば一人で着物を着たといふやうな場合には賞讃してやるが好い。自分の爲すべきことを當然爲した時非常に親が喜んでやつて自己を尊重するやうに導くのが

人格を尊重し人格の發現を認めてやる根本主義である。此外に比較すれば東洋と西洋との相違は色々あるけれども有ゆる違ひと特質とは此の二つが根底をなすやうに思はれる。世の父母は是等の點に注意して家庭教育に心を用ひたならば中を得るに近いであらうと思ふ。(完)

家庭の改善

精華學校長

寺田勇吉氏談

今更改めて云ふまでもなく、日露戦争以後、我々日本人の責任は一層重大になつたのである、我々は此の戦争の結果として世界の一等國民と云ふ資格を得た。なる程露國に打ち勝つて、俄に一等國と云ふ名稱を冠せられるの名譽を得た。得たには違はないが、悲哉、戦争以外の事に就ては未だ歐米の一等國と肩を比する事が出来ないののである。乃ち我々の體格と云ひ、品性と云ひ、氣力と云ひ、就中富の程度に於ては到底英、佛、獨等の

國に及ばぬと云ふ事は明白である。今や優勝劣敗の此世の中に於て、吾人は須臾も油斷をする事は出来ない。尙益益大に發憤する處がなくしてはならぬ。

之れに就ては種々の方法があるのであらうが、吾輩の考ふる處に由れば、先づ第一に我國の家庭を改良しなければならぬ。若し家庭にして充分なる改良が出来なければ、結局我國人の發達は出来ないと云つても宜いのであらう。何となれば、總ての社會のあらゆる罪惡の基く處は家庭である。家庭にして改良せられて兒童の教育にして怠られなかつたならば始めて學校教育も功を奏する。如何に學校の教師が教育に骨を折つても、今日の如く家庭が不備であつては、學校教育が功を奏することとは到底困難である。學校教育が其功を奏しなかつたならば、完全なる國民を見る事は遂に不可能であらう。

元來男子は現在を支配し、婦人は未來を支配する。従つて今日の婦人の責任は極めて重大なるものである。家庭にはあらゆる人道の要素が備はつて居

る。乃ち實地に於ける親子間の道德、夫婦間の道德、兄弟姉妹間の道德、親族間の道德、傭人と被傭人間の道德、其他あらゆる社會的の道德が家庭には備はつて居る。我輩が國民改善の基礎は家庭

にありと云ふ所以である。家庭の改良は眞に目下の急務である。若し第一に家庭の改善に力を盡さずに、狼りに社會の改良を欲するも不可能なりと自分は信するのである。而して此家庭に在つて之れを善くすると悪くするとは一に母の手にあるのである。之れが爲めに先づ第一に良き母を造らねばならぬ。然らば良き母とは如何なる母かと云ふに強健なる身體と健實なる精神とを具備せる母を云ふのである。かゝる母なればこそ始めて健全なる國民を養成する事が出来るのであらう。

元來、家庭の善惡は子孫の盛衰は勿論國家の消長に關する。乃ち家庭の善惡は個人と國家とに大なる關係を有するのである。我國人の惡徳の改良は今日の青年男子を目的とし、到底其の目的を達する事を得ぬ、故に自分

は先づ今日の兒童に良横範を示して幼時より第一に良習慣を付けなければならぬと思ふ。之れが爲めには學校は勿論有力なれど、前述の如く學校に於てのみ訓練しやうと思つても家庭が其の氣にならなければ結局駄目である。畢竟幼時の教育乃ち根本教育の改良は家庭と學校との兩方に存するのである。

吾輩の言を待たず、教育は既に母の胎内に始まつて、出生後之れを怠らず、智育は別として體力と品性とは小學校卒業の頃までに完成すべきものである。中學又は高等女學校に入學後之れを改めるが如きは、爾來の經驗によれば殆んど不可能である。自分は中學生も高等女學校生徒も監理した事が在つて種々改良に就つて骨を折つて見たが、悪しき家庭に於て養成せられ且不完全極まる小學校を卒業したる子弟の十中八九迄は其の改善の見込がないのである。夫故吾輩は愛國婦人會の隣地に精華學校を設立して、幼稚園から生徒を入學せしめ、今日では小學六年生迄の設がある、と云ふ事にした。精華學校には悪い家庭の兒童は一切入學

せしめない入學を申込んで来た時には先づ其の家庭が果して好きか悪きか、殊に母は如何なる人であるかと云ふ、先づ母の人となりを充分に取調べて、然る後始めて其の子女に入學を許すの方針を執つて居る。悪しき家庭の兒童であれば、入學せしめていくら骨を折つても自分の理想的の教育が出来ないからである。

そこで、愛國婦人會の如き有力なる婦人團體に於ては、亦此の家庭の改善と云ふことに充分に努力して貰ひたいものと思ふ。果して家庭が十分に改良せられたならば、學校教育も従つて其功を奏し、遂には社會の改善も出來得るであらうと自分は堅く信じて居るのである。

保育叢話

光藤夫人

○母親の子女に對する態度

父嚴に、母慈といふ諺は、古來より親の子女に對するすべての態度を言ひあらはしたものであら